

二曰嶺北李文卿病兩膝臄屈伸有聲剝々然或以骨鳴戴人曰非也骨不憂焉能鳴此筋濕也濕則筋急有獨緩者緩者不鳴急者鳴也若用予之藥一涌一泄上下去其水水去則自無聲矣李文卿乃從其言既而果然矣ト此ニ據レバ亦骨ノ鳴ニテハ非ザルベシ

〔安齋隨筆 前編 十三〕一奇病 相摸國にヒザヲウと云ふ病あり予が領地かの國にある故其事を聞けり其病の初め膝の邊蟲の螫す如くシクと痛みて大に腫る腫れていたむ捨て置けば膝ふしばかり大きくて脛は甚だ細くなり歩行する事ならず鶴膝風に似たり二三度も痛む者もあり早くなほさゞれば癒えず其地の土民に針治をし覺えたる者あり藥治をし覺えたるものもあり針を立つれば白き膿水出で癒ゆ藥は牽牛子を黑炒と中炒と生と三品一つに粉にして熱湯にて用ひ衣服厚く重ねて大に汗すれば癒ゆと其土民の談なり此藥は秘するト云ふ按るに外邪なるべし牽牛子は瀉下するなり汗にて發散す汗下の二つにて治するはこれ外邪と見ゆ鶴膝風とは別なるべし他國には聞かぬ病なり古代よりある病とみえて其地に針方藥方を傳へたる者あるなり水土によつて如斯病もあるなるべし

〔東遊記 五〕七不思議

一鎌鼬かまいたちといふことあり是は越後の國中にいつれの所にも折節有る事也老少男女の差別なく面部又手足杯を太刀にて切りたる如くおのれと切る事なり疵の大小定らず或は堅或は横にて見事にきるなりされど骨の切ることなし又格別血の出るといふにもあらず只寒熱強く發し時疫傷寒の如し其時其地の傳來にて古き曆を黒燒にしさゆにて用るに數日の間に平癒し疵の跡も見えずなほるといふ此鎌鼬に出合ふ事或は何方の堤又はかしこの辻など其所大抵は定りてあり然れども何のわざといふことも知れず此事越後にも限らず奥州出羽佐渡などにもありといへば北地陰寒の瘴毒人にあたるにやといふ又或人の説には鎌鼬にはあ